

## 芸術文化学群 各専修のカリキュラム・ポリシー

### 演劇・ダンス専修

---

本専修ではリアリズムを中心とする現代演劇や古典芸能の狂言、京劇、またダンスではバレエ、コンテンポラリー、日本舞踊の基礎から応用までを学びます。演劇とダンスについて、実技・実習と理論の両面から総合的に学び、それを社会で活かす演劇人を育成します。また、本専修では年に数本、プロの演出家や振付家の指導による本格的な舞台創作発表を行い、一般観客の鑑賞にも堪える高いレベルの作品づくりを目指しています。

#### ①教育課程の編成

- ア) 1年次には、本学の学生に共通の基礎的な知識と技能を身につけるための「コア科目」およびガイダンス科目として「上演芸術入門」、「舞台芸術基礎A/B」を必修とします。さらに舞台芸術を構成する様々な要素を、広く学ぶことからスタートします。
- イ) 学生の目標は、俳優、ダンサー、テクニカルスタッフ、演出家、劇作家、プロデューサーなど多様であり、コース分けをせず各自の適性と目標を発見することを促します。
- ウ) 演劇やダンスの学びを生かし、地域社会において、演劇やダンスの手法を応用して行うワークショップ等のファシリテーター育成を行います。
- エ) 実践教育に力を注いでおり、プロの演出家や振付家が指導にあたり、本格的な劇場で公演するOPAL（桜美林大学パフォーミングアーツ・レッスンズ）およびOPAPP（桜美林大学パフォーミングアーツ・プログラム）が毎年、複数上演されます。

#### ②学修方法・学修課程

- ア) 演劇・ダンス専修は演劇とダンスを共に学んでいくことで、両分野にまたがる表現を獲得する相乗効果が得られます。例えば1年次の「ダンス基礎I」は、自分の身体と向き合うことを目的とした科目であり、俳優志望、スタッフ志望の者にも有効です。
- イ) OPALやOPAPPは、俳優やダンサー等の技術、および照明、音響、舞台監督、舞台美術等の技術、その両者を有機的に連動させたプロフェッショナル教育であり、実演家やスタッフとして実際に舞台を創り上げる過程を体験し、一般の観客の目に晒される高水準の作品づくりを行います。
- ウ) 地域の文化芸術に貢献する視点を持ち、その観点からアウトリーチ活動やワークショップを実践的に学ぶ場を用意しており、小学校や福祉施設等で行う様々なプログラムに参加することもできます。
- エ) 演劇・ダンス専修の持つ優れた劇場施設の運営の一端を学生が担うことで、「表現の場」の運営や安全管理について実践的に学びます。「舞台芸術祭」の企画制作など、学生自らが創作活動をする機会が多くあり、互いを磨き合い、仲間作りをしながら才能を伸ばします。
- オ) 古典から前衛まで、エンターテインメントから実験作まで、さらに国際的な作品も含めて、優れた演劇・ダンス作品を選び、希望学生に観る機会を提供します。鑑賞後にはレポートを提出し考察を深めます。
- カ) 舞台芸術を学ぶ者は音楽、美術、映画等、他ジャンルの芸術領域や哲学、社会学、

心理学など人間と社会に対する理解が必要であり、他専修あるいは学内外の授業科目の中から自由に選択履修することができます。

キ) グローバルな視野を持つ国際人育成を目的として、毎年、海外の演劇公演を鑑賞する短期研修を実施しています。また京劇の授業は中国に招聘され北京や上海など国際的な舞台上演しています。

### ③学修成果の評価の在り方

ア) 学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた項目と、学修方法・学修過程(カリキュラム・マップ等)により示された、科目が目標とする学修の到達度が学生自身にとってどの程度であったか示すものです。したがって学修成果は科目それぞれで設定されています。

イ) 学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバスにおいて具体的に示します。また、ルーブリック評価など(成功の度合いを示すレベル、それぞれのレベルに対応するパフォーマンス(プレゼン、協同作業など)の特徴を示した評価規準からなる表)を取り入れることによって、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。

## 音楽専修

音楽専修では器楽、声楽、ミュージカル、作曲などの基礎から学ぶことができ、最終的に十分な専門的基礎と応用力を持った音楽人の育成を目指しています。音楽についての総合的な学識と各専門領域の知識・技能の修得を兼ね備えた学修を通じて、卒業後は音楽家、中高の音楽教員といった専門職への進路だけではなく、社会人として必要な発想力、忍耐力、計画性、協調性を持った人材を輩出することを目標としています。

### ①教育課程の編成

ア) 1年次には、本学の学生に共通の基礎的な知識と技能を身につけるための「コア科目」およびガイダンス科目として「音楽入門」を必修とします。入学者の受けてきた音楽教育は多様であり、学生個々の目的、レベルに応じて、ソルフェージュなどの基礎から応用までを学ぶことができます。

イ) 実技科目はピアノ、オルガン、管弦打楽器、和楽器、声楽、ミュージカル、作曲など多岐にわたり、その多くは、1年次から複数回履修可能で、4年間を通じて段階的なレベルアップを目指します。

ウ) 2年次以降の専修科目は、ピアノ、パイプオルガン、器楽、声楽、オペラ、ミュージカル、作曲などの実技・演習および音楽理論、歴史などの講義科目が配置され、どの分野でも自由に履修することができます。

エ) 1～2年次の学修を踏まえ、3年次には少人数指導による「専攻演習」において、専門技能・知識の理解を深め、そして4年次には「卒業研究」に取り組み、学びの集大成として演奏会あるいは研究発表をします。

### ②学修方法・学修課程

ア) 1～2年次の実技レッスンは2科目履修することができ、新たな分野を学ぶ学生の

ために副科実技も設けられています。また、海外から招聘した演奏家による公開レッスンも実施しており、各自に適した履修プログラムを選択することができます。

イ) 演奏系の専攻演習はサービス・ラーニング科目になっており、地域との結びつきの中で実践的演習を行うことで、日々の学修の成果を確認することができます。

ウ) インターンシップを通じて、音楽を支える仕事を体験することで、社会の中での仕事の役割を理解し、卒業後の進路を考える上で役に立ちます。

エ) グローバルな人材を育成するため、海外研修を毎年実施し、海外の芸術文化に触れ視野を広めます。

オ) 専門性を深める学修の他に、学内外の授業科目の中から自由に選択し、多様な関心や目的を達成するために履修することができます。

カ) 音楽専修が鑑賞を推奨するコンサートやオペラなどを選び、希望する学生にチケットを配布します。鑑賞後には事後学修としてレポートを提出します。

### ③学修成果の評価の在り方

ア) 学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた項目と、学修方法・学修過程（カリキュラム・マップ等）により示された、科目が目標とする学修の到達度が学生自身にとってどの程度であったか示すものです。したがって学修成果は科目それぞれで設定されています。

イ) 学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバスにおいて具体的に示します。また、ルーブリック評価など（成功の度合いを示すレベル、それぞれのレベルに対応するパフォーマンス（プレゼン、協同作業など）の特徴を示した評価規準からなる表）を取り入れることによって、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。

## ビジュアル・アーツ専修

---

近年、アートの世界は従来のような美術、工芸、デザイン、メディアアート、映像といったカテゴリーではくくれない、多様でハイブリッドな作品が生み出されています。また今日活躍するアーティストやデザイナーも一つのジャンルに収まらない人が増えています。ビジュアル・アーツ専修では、視覚芸術について幅広い視野と独自の視点を持ち、新たなビジュアル・アーツの世界を切り開く人材を育てることが目標です。

### ①教育課程の編成

ア) 1年次には、本学の学生に共通の基礎的な知識と技能を身につけるための「コア科目」およびガイダンス科目として「ビジュアル・アーツ入門」を必修とします。さらに2年次以降の専門科目を学ぶ上で必要な基礎知識を身につけることができるように、選択科目としてビジュアル・アーツ各分野の基礎的な科目を開講しています。

イ) 2年次以降の専修科目は、美術・工芸、テキスタイル、デザイン、メディアアート、映像など各分野の講義、演習、実習科目から編成されおり、各自が自由に選択することができます。

ウ) 1～2年次の学修を踏まえ、3年次には少人数指導による「専攻演習」において専

門知識の理解を深め、そして4年次には「卒業研究」に取り組み、学びの集大成とします。

## ②学修方法・学修過程

- ア) 美術、工芸、デザイン、テキスタイル、メディアアート、映像などのコース別に学ぶのではなく、1年次には視覚芸術全体を把握し、各分野の基礎力を徹底的に育成します。一人一人が学修の成果を網目状に結びつけネットワーク化させることで専門性を深化させ、各自が個性的で独創的な芸術世界を構築します。
- イ) 専修科目を基礎から応用へと体系的に学修するために、先修条件や履修順序を指定する場合があります。また多くの実技、実習、演習科目は複数回履修することが可能であり、段階的にレベルが向上します。
- ウ) 授業やゼミで制作される作品は、学内外の展示スペースで発表し、多くの人目に触れられることを目指します。また卒業研究作品選抜展を学外のギャラリーで開催し発表しています。
- エ) 学外の美術・デザインの展示会やアートフェスティバルなどの芸術鑑賞プログラムを実施し、希望者にチケットを配布します。
- オ) 専門性を深める学修の他に、多様な関心や目的を達成するために、他専修あるいは学内外の授業科目から自由に選択履修することができます。
- カ) 企業等でのインターンシップに参加し、実践的に学ぶと同時に卒業後の進路を考える機会を得ます。
- キ) グローバルな視野を持つ国際人育成を目的として、毎年、海外の芸術大学での短期研修を実施しています。

## ③学修成果の評価の在り方

- ア) 学修成果は「卒業認定・学位授与の方針」に定められた項目と、学修方法・学修過程（カリキュラム・マップ等）により示された、科目が目標とする学修の到達度が学生自身にとってどの程度であったか示すものです。したがって学修成果は科目それぞれで設定されています。
- イ) 学修成果の評価方法は、科目ごとのシラバスにおいて具体的に示します。また、ルーブリック評価など（成功の度合いを示すレベル、それぞれのレベルに対応するパフォーマンス（プレゼン、協同作業など）の特徴を示した評価規準からなる表）を取り入れることによって、成績評価を分かりやすく可視化し、厳格に評価します。